

## 和漢両語間の媒介者としての『法華経』法文歌 (要旨)

ジャン＝ノエル・ロベール\*

『法華経』を対象とする法文歌が和歌の格別のジャンルだけでなく、仏教教義に造詣の深かった中世の歌人が仏教の教えを日本語で表現すると同時に、中国語（漢語）と日本語（和語）との関係を密接に結ぶ枠を作る道具として使った事実を明らかにしようとする。この役割を果たした和歌は、漢訳仏典が未だ組織的に日本語に翻訳されなかった時代に、和語を聖語にするという重要な結果をも齎したのである。日本の神々と仏・菩薩を習合する「本地垂迹」説の論理に基づいて日本語は二重の宗教的性格を帯びるようになった。日本の神々に創造された和歌はインド・中国の仏教の教理も伝える媒介になったわけである。

序文・歌論などでは、狂言綺語とされていた和歌をつくる事を正当化するため、白居易の有名な文がしばしば引用される：「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、翻為当来世世、讚仏乗之因転法輪之縁」（洛中集記）。鎌倉初期の歌人であった慈円は、「白氏文集」をもとにして詠んだ百首集の跋文で同じ文を引用するが、そこで「翻」の字を「翻訳」の意味で理解することが著しくて、中国の漢字・漢詩を日本の歌に「ひるがえす」詩歌的活動を指すのである。漢詩を「和化」する、すなわち「やわらげる」という翻訳過程そのものは直接に「本地垂迹」説に繋がり、その別名である「和光同塵」の論理を文字通りに具体化するものである。

慈円より二世紀も早く、平安中期の藤原公任は、

言語的媒介によって中国・日本両文化の融合を完成させる手段として極めて重大であった「和漢朗詠集」の編集者として、白居易の同じ文を引用している。

公任の自家集に収録された法華経二十八品歌が示す通り、当時の数多い歌人と同様に、彼の「法華経」に対する関心と知識は大きかった。ゆえに「朗詠集」の跋文とも見られる「白」の部を除けば、「無常」部は集の最後部と見なすべくして、この部の最終歌も集の結論とも言うべき歌で格別な意味を持っている。それは天台宗僧侶であった僧正遍照の歌で、表面的に釈教歌を象るものである：「末の露 本の雫や 世の中の 遅れ先立つ ためしなるらん」。一般の解説では、この歌が「法華経」方便品第二の「十如是」の文を元とする釈教歌の形を取ったものであるという重大な事実は無視されるようであるが、十如是の最後である「本末究竟等」の光のもとで、「本」である漢語と、「末」である和語は融合されて、完全に平等になるのである。

\* コレージュ・ド・フランス教授